



妹の家族、御世話になっている皆さんに感謝

近藤 弘子

26年前主人と出掛けて事故に遭い、目が覚めたら体が動かず、何が起きているのか解りませんでした。1週間ぐらいして主人は亡くなり、お葬式も済んだと聞かされました。それから時間が掛かろうと、辛かろうと苦しかろうと、絶対子供の為に治さなくてはと思いましたが、時間が経つにつれ元の体のようにならない事が解り、流した涙もふけず、痒い所にも手が届かず、死ぬにも自分では死ねず、辛いリハビリと本当の事を告げるお医者さんの言葉に傷つき、心配してくれる人達にも会う気にならず、妹にあたりちらす。

そんな時に妹の主人から「妹が、家族、子供の事より、お姉さんの事を心配している」と聞かされ、ハッと我にかえり、これ以上我儘を言わず皆に助けてもらおうと思いました。

退院して家に居ると、妹の義父が「はい、〇〇歳以上の人の好きなケーキだよ」と寂しいだろうとそっと訪ねてくださり、挫けそうになると「大波の後には必ず小波の時が来るから、もがcaずに静かに待つ」と教わり、悲しい事ばかり続き泣きたくなると「苦しみや悲しみは生きている証拠」と義母に教わり、これらの言葉に励まされ、挫けそうになるとこの言葉を思い出して、静かに耐えておりました。

その義父も7年前に亡くなり、感謝している事を伝えられませんでしたので「いやしの広場」の原稿募集を聞いた時、此处で感謝している事を知らせようと筆を執りました。その時20歳だった息子も自立し、甥、姪も結婚して実家に来ると子供を連れて遊びに来てくれ、わいわい皆で食事をするのが

楽しみです。妹の主人に「貴方たち姉妹は、人が合わない悲しみ、苦しみを味合った分だけ、これからの人生にプラスにしていけないとね」言われました。

今は自宅で皆さんにお世話になりながら、笑顔で話せる様になり、入院している時からお世話になっている美容室の先生とも長いお付き合いで、楽しくお喋りが出来るようになりました。最初の頃は何と声を掛けたら良いか、私と顔が合わせられなかったそうで、今のようになれるとは想像出来なかったと喜んでもらっています。

それでも何年経とうと、死ぬまで一日たりともあの日の事を忘れる事はありませんが、あの世に行った時に、良く頑張ったと主人に言ってもらえるよう、これからも肩の力を抜いて皆さんにお世話になりながら、一日一日を大切に生きて行こうと思います。

